

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 谷垣 聡一郎

① 学習成果

私は本プログラムにおいて、「高度経済成長期のインフラ政策に見る日本人の環境観」というテーマで発表を行いました。

日本におけるインフラ整備は、特に高度経済成長期において急速に推進されましたが、その背景として1964年の東京オリンピック開催がありました。昭和31年(1956年)の経済白書に「もはや戦後ではない」という文言が記載されたように、当時の日本社会は戦後復興から立ち直ったばかりでしたが、経済の立て直しが何より最優先されたため、インフラ政策は立ち遅れていました。そんな中、1964年オリンピック大会の開催地が東京に決定されるや否や、大会の選手団や関係者、諸外国の有名人、国内外の観覧客等の移動を確保するため、首都高速道路や東海道新幹線といったインフラが急速に整備されたという歴史的な背景があります。

他方で、当時の急速なインフラ整備には、騒音や振動といった生活公害や都市景観の阻害といった負の要因に目を向けていない部分が大きく、2020年オリンピック大会の開催地が再び東京に決まった今日、1964年当時の環境観を振り返りつつ、来る2020年大会に向けてどのような環境観のもと大会の準備並びにそれに伴うインフラ政策を行うべきか模索する機会の重要性について学ぶことができ、非常に有意義な学習機会となりました。

② 海外での経験

私はハイデルベルクには過去に何度か訪れる機会があったので、ハイデルベルクの目新しさに驚くというよりは、むしろ第二の故郷に帰ってきたかのような安心感がありました。他方で、ストラスブールは初めての訪問だったので、ストラスブールという街の特殊性を実感しました。

最も印象的だったのは、ストラスブールが特殊な場所に立地している点についてでした。ストラスブールはアルザス地方の主要都市であり、ドイツとフランスの国境付近に立地しています。フランスの首都パリまでは電車で3時間である一方、ドイツの都市までは電車でたった30分という距離感、島国日本に住む私達には目新しいものだと感じました。ストラスブールにNeustadt(ドイツ語で新たな街の意味)というエリアがあるように、フランスの都市でありながら街にどこかドイツらしさを漂わせている点も、アルザス地方ならではの感じました。

③ プログラム内容

私は、活動1日目のストラスブール市内視察について述べさせていただこうと思います。

最初に、Cave historique des hospices civils de Strasbourg(ワイン博物館)に行きました。こちらの施設は1395年に作られたそうで、地下の洞窟に沢山のワイン樽を保管してありました。中には1472年産のワインの展示までされていて、非常に貴重なものを拝見させていただきました。また、博物館としての展示だけでなく、入り口でアルザス産の多種多様なワインを格安で購入できるようになっているのも粋な計らいでした。

次に、Museum Historique de la ville de Strasbourg(ストラスブール市歴史博物館)に行きました。ストラスブールは世界史上、ドイツとフランスの係争地だったこともあり、街の帰属がフランスになったりドイツになったり右往左往したという歴史的背景があります。そのためか中世の騎士の鎧や甲冑といった展示品も多く、甲冑を実際に装着できるブースでは、アルザス地方の歴史の重さを彷彿とさせる甲冑の重さをも体験する事ができました。

最後に、自由時間に私はストラスブールの公共交通機関について視察しました。日本における地方都市では車社会化が問題となっており、車中心のまちづくりが進められてきた経緯があります。ストラスブールもかつては車社会化と乗用車による交通渋滞等に苛まれていたものの、車中心のまちづくりから人と環境に優しいまちづくりへの転換を模索した結果、公共交通機関の整備に成功した街だそうです。日本における地方創生に役立てられる部分がないかと思い視察していましたが、街の中心部に車がほとんど乗り入れされておらず、歩行者や交通弱者(子どもや高齢者、足に不自由のある人等)にとって優しい街だと実感しました。例えば、LRTというトラムとバスが街の至る所を走っており、運行本数も日本の地方都市に比べて多いと感じました。また、階段を上らずともそのままトラムに乗車できる場所も多く、階段が負担となりやすい高齢者にも細かな配慮がされていて、子供から高齢者まですべての世代の人々が快適に街を過ごせる、素晴らしい街だと改めて思いました。

④ 進路への影響

私は渡航前、学部卒業後に霞が関の国家公務員として地方の為に奔走したいと考えておりましたが、地方創生を考えるうえで、ストラスブールとハイデルベルクという二つの海外の地方都市を視察できたのは非常に有意義な経験となりました。また、ドイツ・フランスの大学院生と交流する中で、海外の大学院で世界中の留学生たちと議論し、日本という国について堂々と説明できるようになりたいという思いも新たに生じつつあります。特に、国境を越えた人の流れに限らず、「人の流れ」という現象に焦点を当てて考察する事で、日本における都会から地方への人の流れを作り出すにはどうすればいいかについて考える手掛かりになるのではないかという問題意識から、transcultural studies という学問それ自体にも強い興味関心を抱くようになりました。

本プログラムを通してお世話になった国際交流推進室の職員の方々やカム先生夫妻、引率の橋本さんと横田さん、ストラスブール大学とハイデルベルク大学で交流した学生の皆さん、共に研修を過ごしたプログラムの仲間たち、並びに今回のプログラムを通して関わった皆様には心より感謝の気持ちを述べさせていただければと思います。本当にお世話になりました。